

道 徳

宮 島 浩 典

1 めざす子どもの姿

道徳では本質を、「道徳的価値を内面的に自覚し、自分の生活や行動の中に反映していこうとする意欲や態度（道徳的実践力）を育てる」ととらえ、それに基づく基礎・基本を「道徳的価値に照らして自分をふり返り、自分なりの生き方の指標を持つとうとする」として研究を進めてきた。

そして今年度は、道徳における個の自発性のあらわれを「自ら働きかける」と定義し、次のようなめざす子どもの姿をめざしている。

豊かな心を持ち 自己の生き方を見つめていこうとする姿

めざす子どもの姿については、道徳における本質や基礎・基本、さらには以下にある子どもや家庭・地域社会、教師の願いを考慮し、設定した。

- ・自分自身や未来をしっかりと見つめ、よりよく、より望ましく生きたいという子ども自身の願い。
- ・心豊かで、たくましく生きる子どもを育てたいとする家庭や社会の要請。
- ・子ども自身が自分なりの生き方を考える機会を少しでも持ち、豊かな人間関係を築いていって欲しいとする教師の願い。

「豊かな心を持つ」とは子どもにとって必要不可欠なことである。それは「生きる力」の核となる「豊かな人間性」ともいえる。

私たちは具体的には以下のことを研究の重点としてとらえている。

- ・美しいものを感じる心や自然の偉大さ、素晴らしさに心を動かす感性。
- ・生命あるものを大切に、尊いものであると感じる心や態度。
- ・他者に対してあたたかな気持ちで手をさしのべることのできる思いやり。
- ・他者との違いを受け入れる寛容な心。
- ・自分を律し、自らの責任を果たそうとする意志。
- ・明るい未来を信じて自らが切り開いていこうとする力。

「豊かな心を持つ」とは心の土壌を耕していくことであり、自分を取り巻く「ひと・もの・こと」を自分なりの思いで感じていくことであると考えた。

次に「自己の生き方を見つめる」ということについて述べる。これは、道徳の時間において子ども自身が道徳的価値を自分自身の中で主体的に補充、深化、統合しながら追求していくことである。学校生活の様々な活動の中で、多様な道徳的体験を通して道徳的価値に接している子どもが、似たような場面や道徳的価値を自分の心に思い起こし、その価値について考える機会を持つことから始まる。考える機会を持つことは、道徳的価値を自分なりに納得し理解していくことを可能とする。これは、道徳的価値の絞り込みであり、内面へのより深い掘り下げが起こったと言える。

また、これらの過程の中で「今までは～のように感じていたけれど～なんだ」「～のような考え方もあるのか」など、友だちの考えを知り新たな感じ方、考え方、再認識が生み出されることにもなる。

対象となる学びの場は、道徳の時間が主であるが、日常生活や他教科、学校をこえて生まれてくるものもある。体験と道徳的価値が自分自身の中で相互に結びつき、自分を取り巻く事象への、よりよい、より望ましい形でのあらわれがそうである。それは、地域社会・家庭へとつながる道徳であり、社会貢献の精神へと根づいていくものでもある。

私たちは、前述した「豊かな心を持つ」「自己の生き方を見つめる」ができれば、個の自発性のあらわれである「自ら働きかける」が見られたと考えている。そして、これを生み出す、課題を取り込み自らの価値観を知る、自分と他者の相違点を考え学習者相互に認め合う、自己評価活動で自分の考えをもう一度練り直すなどの価値観を形成する過程を大切にしている。

この過程こそが、一人一人の子どもが自分自身の中で自分なりの生き方を見つめていくことであり、道徳の本質に迫る、めざす子どもの姿と考えるからである。

2 めざす子どもの姿に迫るために

(1) 資料の多様化をはかり主体的な 道徳的価値への働きかけを促す

道徳の時間における資料は、主題を形作った、道徳的価値を追求する上で大きな役割をしめるものである。そして、よい資料を選び、開発することは、子どもが主体的に取り組む授業を行う上では、欠かすことのできない要素である。

道徳の資料の場合、読み物資料が多くなるがその資料を選ぶ際にも、子どもの実態や悩みを考えての選択が有効である。興味・関心が持てるもの、親近感のあるもの、感性に訴えることのできる資料も魅力的である。子どもの作文や道徳ノート、日記などにも（本校の場合は「あゆみ」）子どもたちが当面している課題が書かれていることが多々ある。それらを利用しての自作資料は、問題解決を促す側面を持つことが多く、子どもたちの反応もかなり高いものがある。

道徳で扱う価値は抽象的であることが多いため、経験が少ない子どもにとって、価値はなかなか自分自身に結び付いていかないのが現状である。そんな時は、資料としての映像の利用、疑似体験、追体験により、道徳的な状況を膨らませていくことも大切になる。具体的には新聞資料、写真、絵、実物などの提示。子どもの様子などを取材してきたVTRや録音、統計や調査を伴う資料なども有効である。

資料を生かしていくという面では、思考過程に沿った発問の工夫も、子どもの道徳的価値に主体的な働きかけを促すためには大事なことである。

(2) 豊かな心を育てるために家庭・地域社会との連携を生かした道徳を行う

子どもによる教育活動をより多様に、充実したものにしていくためには、家庭・地域社会との連携が効果的である。家庭・地域社会との繋がりが強くなり、学校とのパイプが太くなれば、様々な面から豊かに子どもの心を育てることができるようになる。

保護者や地域社会の方々に協力して頂く方法としては、特技や専門の知識を生かした体験活動の講師（ゲストティチャー）としての参加がある。本当のものを、その場で、子どもたちに直接教えていく場である。その人なりの苦労や努力を伝える、子どもに対する思いを伝える場としても有効であると考えている。

保護者が子どもと同じ立場で、道徳の時間に参加することもある。また、子ども各自にあてた手紙を保護者に依頼するという形での参加もある。子どもにとっても保護者の思いを知る機会にもなり、意欲的に取り組むことができると考えている。

(3) 多様な場の工夫を取り入れ 互いの考えの共有化や

自分なりの価値の再構築を促す

自分なりの意識や考えを見つめていくことは道徳では大切なことである。そのためには、一人一人が自己の持つ価値観を認識したり、互いの思いや考え方を知る交流の場も必要になってくる。学習形態の工夫を取り入れたたり、個々の考えを明確化したりしていく討論的な学習、調査を含んだ学習なども共有化には効果的だと考えている。他にも、テーマ別グループによる学習を計画したり、複数学級、異学年集団、1対1による少人数学習など多様な形態での学習を模索したりしている。

また、学習の場の工夫としても、多様化が考えられる。取り扱う内容によって教室の座席の配置を変えたり、特別教室や校舎外オープンスペースで道徳の時間を行うこともできる。それにより、学習の幅を広げたり、より主題に対する追究も可能になる。多様な場の工夫を取り入れ、互いの考えの共有化を図ったり、価値の再構築や価値追求を促していく。

(4) 自己評価活動で自らの生き方を見つめて いこうとする意欲や態度を育む

自ら見つめていこうとする意欲や態度を育てていくには、自分はどうか考えるのか、自分はどうすべきなのかを真摯に考えていくことが必要になる。そのためには、道徳的価値形成に至った過程を自分なりに感じ取り、気づいていくことが重要な要素となる。ねらいに対する考え方や初めの自分の思いを吹き出しカードに書く、互いの思いを知って考えをまとめるなど、交流後の思いを綴る評価活動も必要になっていく。これらの活動を通して、自らの生き方を見つめていこうとする意欲や態度を育むことを目指している。

同時に、子どもの道徳性について常に実態を把握し、指導に生かすことにもなり、子ども自身の内面に働きかけ、自らが変容を期す力につながるものと考えている。

3 実践例 — 3年 —

- (1) 主題名 もうしない 1-(2) 思慮 反省
(資料名 「ぞうくんのめがね」 『新しいどうとく 3』 光文書院)
- (2) ねらい
- ・自分の行為をふり返りよく考えて行動しようとする態度を養う
 - ・人との関わりのなかで、自分なりに自分の行動をしっかりと見つめ、考えることができる。

(3) 指導にあたって

本主題におけるめざす子どもの姿について

本主題における基礎・基本は、自分のこれまでの行為やありようをしっかりと見つめ、考えていくことである。

3年生ともなると、これまで「○○さんが～したから、自分は～になった」と訴えたり、言い張ってきた児童も、少しは自分の行為を、自分なりにふり返って考えることができるようになってくる。しかし、自分をふり返るといっても、それは、他の人との関係の中でのことである。この時期の子どもが自分の行為をふり返ることができるのは、友だちに、「どうしてそんなことをするのか」「貴方がそんなことをしなければよかったのに」というように、指摘されたり、非難されたりした時が多い。自分の過ちや欠点を、自分なりに素直な気持ちでみることができにくく、まだまだ、考えることよりも、感情にまかしての行動が、最優先するからである。

そこで、道徳で掲げためざす子どもの姿「豊かな心を持ち 自己の生き方を見つめていこうとする姿」を本主題を通して見た場合、子どもの中に、他の人による指摘ではない、自分なりの意識で自分のありようを見て、考えていくことを願っていた。意識して考えるということがなければ日常の生き方や考え方は、次から次へとスムーズに、あるいは安易に流されやすい。そのため、生き方や考え方が少々違っても、あまり自分にとっては問題視されることはない。それが気になり、気がかりとなるのは、いやがうえでも自分が自分を思い知らされる挫折に出会った時、これまでの生き方が行き詰まった時、あるいは、考え方に迷いが生じた時である。そこに、自分の不完全性が見えてくるのである。不完全性が見えてくれば、何とかしなければという心が生まれてくる。この気持ちを3年生なりに感じ、自分の行為をもう一度見直す機会を持つことができればと考え、本主題を設定した。

この時間で扱う資料は、いたずら者の象のダア君が、將にこの状態に陥ったものである。父親に買ってもらった眼鏡によって、小さな動物に対する見方が変わっていくダア君の心の変化を考えることによって、ねらいとする価値に迫らせていく。

めざす子どもの姿に迫るために

① 場面絵を使った資料提示で主体的に道徳的価値への働きかけを促す

導入の段階では、道徳的価値を含む資料を子ども一人一人が、自分の問題として受け止め、考えられるようにしていくことが大切になる。そこで、場面絵を紙芝居として黒板に貼り、資料への興味・関心を持たせるようにした。これは、板書の一部として利用できるし、主体的に話し合いに参加したくなるような意欲づけを図ることもつながると考えた。

② 「あゆみ」を利用し 家庭との連携を生かす

道徳の時間の後に、学習した感想を「あゆみ」に書く活動を取り入れた。また、保護者には、子どもの豊かな心を育てていくために、道徳の時間の資料を読んでもらい、よく考えて行動することの大切さを中心に、子どもの「あゆみ」に感想を書いてもらうように依頼した。これは、子ども自身のふり返りだけでなく、家庭との連携で学校と一体となる効果的な道徳教育の推進を図り、教育活動への協力を得るシステムづくりの構築をも念頭に置いたものである。

③ VTRを利用し 互いの考えの共有化を図り価値への再構築を促す

4月に入学した1年生は、自分たちでメモなどを見ながら係活動の練習をしている時期である。1年生は係活動についてはまだまだ上手ではないが、自分たちなりに、一生懸命に係活動のやり方を覚えようとする意欲に満ちていた。一方、3年生は、係活動に慣れてきたこともあり、活動をいい加減に行ったり、忘れたりすることも多くなってきた。そんな中、1年生の終わりの会の様子をVTRで見ることで、自分たちの係活動への取り組みをふり返り、自分見つめる場を設定していった。

④ 「一年生へのお手紙」を利用し自らの生き方を見つめていこうとする意欲や態度を育む

VTRを収録させてもらった1年生の学級へ手紙(大きめの付箋紙)を書くことにより、1年生への励ましと自分自身に対する気づきという形でふり返りができればと考えてた。3年生は昨年度も下級生との交流を数多く経験しており、1年生への優しさと共に、自分たちにとっての課題を見い出していってくれることを期待したものであった。

本時における関連	子どもの意識の流れ	評価ポイント
<p>道徳 がまんする1-(1)節度・節制</p> <p>道徳 もうしない1-(2)思慮・反省</p> <p>学級での生活・学習 友達との関係 係活動、当番活動</p> <p>道徳 反省する心1-(2)思慮・反省</p>	<p>我慢することは大切だな</p> <p>よく考えて行動しないと</p> <p>危険なことはやめよう 友達とは仲良く 友達と協力してみよう</p> <p>友達の注意も聞かないと</p>	<p>日常生活において 進んで自分の生活を自分で律することができるようになる</p> <p>係活動 当番活動などで自分の行いをふり返りながら よく考えて行動するようになる</p> <p>掃除や集団行動の時などに 友だちの注意を素直に聞いて言動を改めることができるようになる</p>

(4) 本時における授業の実際と考察

今年度は、道徳におけるめざす子どもの姿を「豊かな心を持ち自己の生き方を見つめていこうとする姿」と設定し、その姿に迫るための実践を重ねてきている。

本時は、自己中心的な考えの抜けきらない3年生の子どもに、自分の行為をふり返り、しっかりと自分自身の行動を考えていく機会を与えたいとの思いで設定したものである。そして、前述した、めざす子どもの姿に迫るための4つの手だてを設け、実践を行ってきた。

考察にあたっては学習活動の流れに沿って、これら手だてが豊かな心で感じていくための一助となりえたか、自らの働きかけで価値観を形成する過程において有効となりえたか、子どもの考えを多様に引き出す指導過程であったかを、子どもの発言や反応、自己評価活動から見ていく。

① 本時までの思い(学級での様子から)

本校では、3年生と5年生でクラス替えが行われる。3年生になって新しい学級になった子どもの多くは、これまで仲のよかった友だちと別れたり、人間関係がまだうまく作れなかったりすることで不安と期待の入り交じった状態にあった。そんな中、子どもが一番苦勞していたのが当番などの係活動であった。「みんな自分勝手なことをやっていて話を聞いてくれない」「なかなか静かにならない」などの声が聞こえてきた。そこで学級活動の時間に注意を促し、改善を図っていた。

以下は、毎日子どもが書いている「あゆみ」の中に記された、その時の思いである。

「あゆみ」より

- わたしは当番になるのがとてもいやです。当番になって大きな声で言ってもだれもしずかにして聞いてくれません。先生が「しずかに」と言った時だけです。この前、当番になった時、だれもきいてくれないので泣いてしまいました。
でも、自分が当番じゃないときは、わたしもみんなとおしゃべりしてうるさいと思います。しずかにしなければいけないと思うのですが、なかなかできません。
- 当番になったとき、みんなあまりぼくの話をおきいてくれませんでした。当番のやり方とかはわかっているけど、みんなうるさいです。帰りのおそいやオープンスペースで走っている人もいっぱいいます。はやくしずかにしてほしいです。
- みんなは自分のことだけ考えていると思います。当番になったときだけしずかにと言っていますが、そんな人が一番みんなのことを考えていません。わたしもその一人です。

このように、何人かは係活動にしっかりと取り組まなければと、自分の問題としてとらえているが、なかなか変化が見られなかった。それは、結局、自分のことだけを考える傾向にあり、多

くは無関心であったからだと考えられる。

そこで、思慮・反省を中心とする価値を関連させた道徳の時間を設定した。はじめに節度・節制を価値とする時間で自分の生活を律する気持ちを持つ。次に係活動などの場面を取り上げ、その価値について考えていく。そして、他人の注意を聞いて、自分の行動を改めていくという流れで道徳の授業を計画した。

② 展開の概要（本時）

主な学習活動と内容	○ 支援 ● 評価
1 何でも大きく見える眼鏡をかけると何がどんなふうに見えるかを話し合う	○ 眼鏡を用意し それに関心を持たせ資料に入る
2 資料「ぞうくんのめがね」を読んで話し合う <ul style="list-style-type: none"> ・ 大きく見える眼鏡をかけてダア君は何を見たか ・ お父さんはなぜ ダア君に眼鏡をかけさせたのか ◎ ダア君が友だちをいじめなくなったのは	○ 場面絵を利用し資料提示 ● むいぐるみを使い父さん象の願いを表現できる ○ ダア君の気持ちを考える場を設ける
3 人の意見を聞いて自分の行いを反省したことがないかを話し合う	○ これまでの自分の行為を見つめていく場を設ける
4 1年生の「終わりの会」のVTRを見て 自分の考えを発表する	
5 1年生へメッセージを書く	● 自分の行為を素直な心でふり返ることができる
他の時間を利用して「あゆみ」に本時の感想を書く 保護者のコメントを利用し 話し合う	(家庭との連携、学級活動)

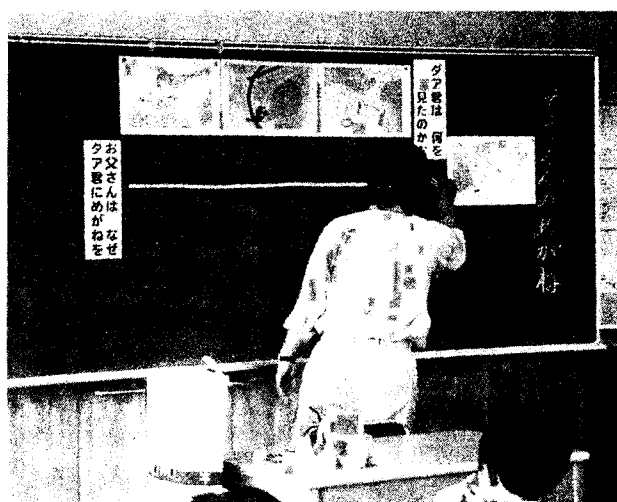
③ 本時における導入

資料提示の工夫により 主体的に
道徳的価値への働きかけを促す

道徳における導入は、主題に対する興味や関心を深めて、学習への課題を持ち、意欲を高めるために重要である。その導入部分において、一枚絵を用い、紙芝居形式で授業を進めていった。資料「ぞうくんのめがね」は副読本にもあり、子どもは文字から内容を知ることできるが、絵の方がインパクトもあり、イメージしやすいと考えたからである。また、一枚絵の方が板書にも利用できるし、絵の表情や雰囲気から自由に想像できるという利点もある。

もちろん、絵を見せただけでは十分ではなく、資料提示においてもゾウのぬいぐるみを使ったり題名にある眼鏡を用意したりして、道徳的価値につながる興味・関心を持たせる工夫をしていた。

はじめに、子どもに眼鏡を見せた時、とても興味を持って話に聞き入っていたし、ぬいぐるみを出した時には、楽しそうな笑みがこぼれていたのが印象的であった。授業後、ある子は、「わたしは紙芝居が好きだから、今日のお話はよく分かったよ。」と話してくれた。また、ある子は



一枚絵を板書として利用

「ぬいぐるみをさわってみたかったので、わくわくした。自分も眼鏡をかけると何が見えるかなと考えた。」というふうに感想を語っていた。

資料の内容も、自分たちの日常生活によく見られる事柄だったこともあり、主人公の行動に共感できる面が多くあったことも、子どもの興味を引いたと考えている。

導入における道徳的価値への働きかけについては、スムーズであったと考えている。

④ 展開

多様な学習活動を取り入れたり、教材の開発、活用を行ったりして 互いの考えの共有化や価値の再構築を促す



ぬいぐるみを使って

道徳の時間では、資料をもとにした一斉の話し合いによる学習が多い。そこで、めざす子どもの姿に迫るために創意ある授業を行いたいと考え、多様な学習活動を取り入れたり、教材の開発や活用を計画したりした。

ア 役割演技で

資料を扱う上では、子どもが資料に共感し、その内容をいかに自分にとって身近に感じられるかが大切になる。そこで、役割演技を取り入れた学習活動を行った。

役割演技を取り入れた箇所は、ぞうのお父さんが、いたずら者のダア君に何でも大きく見える眼鏡を与える場面である。役としては、お父さんぞうとダア君の二つがあるが、子どもにはお父さんぞうの役を演じさせた。お父さんぞうの役を演じさせる場面を取り入れたのは、普段自分自身が家族から友だち関係に対して言われていること、自分自身は意識していないが、心の片隅にある思いを感じることができるのではと考えたからである。

ここでは、お父さんぞうの願いを自分なりに表現することがめざす子どもの姿の表れとして見て取れると考え、授業における評価の一つとした。

以下は、子どもが役割演技としてお父さんぞうの願いを話した授業記録の一節である。

〈お父さんぞうはなぜダア君に眼鏡をかけさせたのでしょうか。お父さんぞうになってダア君に話して下さい。〉

C1：もう他の動物や虫たちをいじめたり、いじわるしたりしないんだよ。

C2：小さくても、みんな助け合って生きているからいじめないでね。

C3：森のみんなにもういじわるしないんだよ。

C4：ちゃんと森のみんなのことを考えられる子になってほしいな。やさしい思いやりのある子になってね。

C5：お父さんはダア君のことが大好きだから、森のみんなにきらわれないようにしてね。

C6：眼鏡をあげるから、今までダア君がいじめた動物さんたちの見ていなかったところを見てきてね。

場の設定として、お父さんぞうの立場で話させたことは子どもにとって、より資料の内容に入り込めることができよかったですと考えている。しかし、教師側としては時間の関係で、子どもの表現に対して「上手だったよ」「きちんとお話することできたね」という程度の言葉かけしかできなかったことが反省であった。子どもの発言の中には、彼らなりの発言の背景となったことがあった。これは、道徳の時間の後で、子どもの「あゆみ」の中に書かれていることからわかったことである。



お父さんの願いはね・・・

役割演技を取り扱う際には、表現されたものだけではなく子どもの内なる部分から湧き上がってくるものも、共に考えていく必要を感じた。「あゆみ」を書いた子どもにとっては、お父さんとの関係の中での表現だった。教師側がもう少し子どもの発言に敏感であったならば、めざす子どもの姿に迫ることができる場面の一つになりえたのではと考えている。

イ VTRを利用して

道徳で用いられる教材は子どもの心を喚起し、生き方を考えさせるものでなければならない。特に、展開の後半部分においては、子ども自身のあり方や行為について多様に感じ、考えを深めていく場の設定が重要となる。

この授業において、教師側としては互いのわがままを捨て、協力し、係活動や当番活動を行って欲しいという願いであったが子どもの意識は違っていた。友だちに優しくする、ダア君が眼鏡をかけた時のように小さな生き物を大切にしていこうという捉えであり、資料の中からはなかなか抜け出せない状態であった。3年生の子どもには、実際の自分の生活の中で考えていかなければならないことにまでは思いが及ばなかったのである。係活動に不満を持っている子を指名しても、下記のような発言を繰り返すだけであった。これまでの取り組みから、ふざけてしまうという発言の後には、係活動がうまくいかない実態が出てくると考えていたが、子どもの意識には係活動のことはなかった。

以下は、教師の思いと子どもの意識のずれがはっきりと見られた授業の場面である。

〈これまで勉強してきた、実際にみんなの生活の中で、とくに3の1の学級の中で考えていかななくてはならないことはないか考えてみましょう〉

- C：男子にへんなことを言われたら、すぐにたたくこと。
C：すぐにけってしまうことかな。
C：ぼくは、他の人のせいにしてしまうことだと思います。
C：ありをふんだりしている人もいるよ。
C：毎日おこっている人もいる。
C：だめと言われてもやってしまうことです。
T：だめといわれるのはどんな時ですか。
C：勉強をしている時にふざけて。
C：うるさい時です。
C：いらついてしまう時です。
C：ふざけてうるさい時です。

そこで、VTRを利用した。1年生の終礼時の様子をビデオに録り、3年生の子どもに見せ、自分をふり返り、自分の行為を考えていく場を設けた。撮影にあたっては、たてわり活動や清掃活動で顔見知りの1年1組の学級にお願いした。

この1年生の終礼時のビデオを見るまで、教師の意図することと子どもの意識がかみ合わない状態があったが、今度は、係活動への不満が湧きだしてきた。ビデオの内容は、3年生の子どもに大きなインパクトを与えたようであった。1年生といえば、まだ幼く自分たちよりも何もできない、手を差しのべるべき存在であったはずである。ところが、1年生でもしっかりと話を聞いたり、整然と終礼を行ったりしている様子を見て、自分たちの認識も、価値観も大きく変わったようであった。

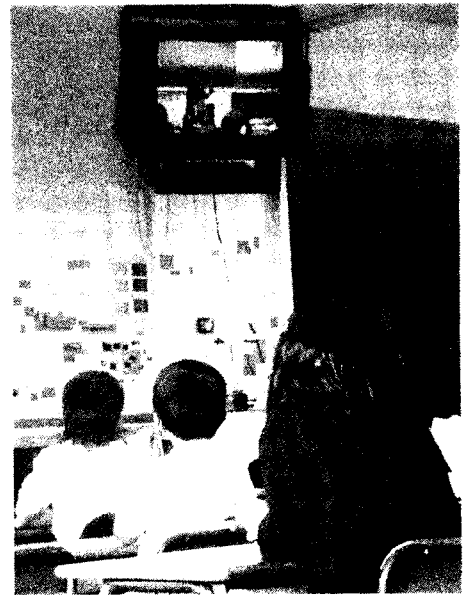
子どもの意識を考えると、VTRの利用は有効であったが、資料と実際の生活を結びつける、教師側の発問の不的確さや体験に根ざした活動のおさえの必要性を痛感した。

⑤ 終末

自己評価活動で自らの生き方を見つめていこうとする意欲や態度を育む

子どもの「あゆみ」から

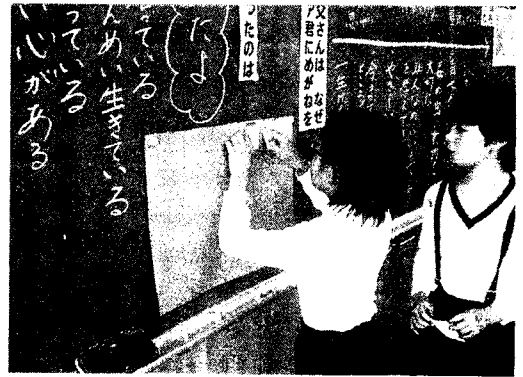
今日、道徳の時間に「ぞうくんのめがね」のお話をしました。ぼくが、ダア君のお父さん役をしたときに、すごくきんちょうしました。でも、ぼくが悪いことをしたとき、いつもお父さんに言われているように話しました。お父さんは必ず、「お父さんは〇〇のこと大好きだよ」と言ってから注意します。ぼくは、その時はいつもちゃんと聞けます。



ビデオに見入る子ども

3年生の子どもはビデオを見て、大きな衝撃を受けた。いつもなら自分の行為をなかなかふり返ることのできない3年生であるが、素直な気持ちで1年生にメッセージを書いていた。以下はそのメッセージの一節である。

- いろいろなことを教えてくれてありがとう。とても感しゃしています。
- 2年生に負けてくやしいよ。でも、こんどからは負けないようにします。
- 正直いってくやしいです。けど、上手でした。
- すごいね、しずかに帰りの会ができて。3年生も見習わないといけないと思いました。



メッセージを貼る子ども

3年生の子どもにとって、このメッセージを書く活動は、1年生への感謝の気持ちとともに、自分たちの課題を明確にしたものでもあったといえる。ビデオの内容が子どもの意識を揺り動かしたことはいうまでもないが、素直な気持ちで1年生の様子を見られたことは、資料の果たした役割も大きかったと考えている。子どもは、この場面では自らの生き方を見つめていこうとすることに対して意欲的であったと捉えている。

⑥ 授業を終えて

豊かな心を育てるために家庭・地域社会との連携を生かした道徳を行う

道徳の時間の学習をより効果的に、より意識を継続したものにするために、家庭との連携を取り入れた。具体的には、子どもが道徳の時間に学んだことを保護者に話し、感想の「あゆみ」を見せ、それに保護者からのコメントを頂くということであった。保護者のコメントは、友だちや教師とは違う立場からのものであり、我が子の成長を願う気持ちが込められていた。そのコメントをある子は、今後の自分の課題として考えたと話していたし、またある子は家庭での一つの話題となったとも話してくれた。

この取り組みは子どもの心を揺り動かす意味において、あるいは、何気ない中での価値を意識化する面においても、効果があったのではないかと考えている。以下は、保護者からのコメントである。

- 気づかずに人にいじわるしていることがあるかもしれませんね。でも、他人の痛みの分かる人になってね。お母さんも気をつけるよ。
- 1年生は一生懸命に聞いているんだね。君もそうだったよ。話をしている人に耳をかたむける、一人一人がそうしないとクラスは上手にまとまらないね。頑張る。
- 顔の形、体の大きさ、声だってみんな違ってあたりまえだよ。心が大切だよ。人に優しくできる人は一番強いんだよ。
- 貴方も人の意見をよく聞いて、相手の気持ちになって考えられる人になってね。

様々な活動を通して、「めざす子どもの姿」に迫ってきた。一つ一つの手だては、多様な考えを引き出すことにおいては効果的であったと捉えている。しかし、子どもの価値形成の過程を考えれば、まだまだ強引な指導であり、子どもと教師の間のずれがあったことも事実である。それは、子どもの発言がどのような観点からのものであったのかというところが、不明確であったために起こったことでもある。子どもとの関係、子ども同士のつながりを確固たるものにしていく必要を痛感した。

また、「めざす子どもの姿」と「自らの働きかける」の関係、自己評価活動における視点についても曖昧さが残る。今後はさらに実践を重ね、道徳における「めざす子どもの姿」に迫っていききたい。そして、少しでも、子どもの豊かな心の育ちに寄与することができればと考えている。